

# 江戸川乱歩・野村胡堂往復書簡

—— 黒岩涙香本をめぐつて ——

丹羽みさと

はじめに

江戸川乱歩（平井太郎）は、名古屋に住んでいた小中学生の頃、黒岩涙香の作品に魅了され、集中的に読み進めていた時期があった（「涙香心酔」<sup>1</sup>）。しかし、次第に涙香の「古い型のメロドラマの勝った作風で、なまぬるい感じ」（「私の履歴書」<sup>2</sup>）に倦み、エドガー・アラン・ポーやコン・ドイルなど、海外の探偵小説へと手を伸ばしていったことはよく知られている。

とは言え、乱歩は涙香作品への関心を失ってしまったわけではなかった。大正十四年七月『写真報知』に掲載された「百面相役者」には涙香作品を引き合いに、作中の芝居

を評する場面がある。

涙香小史のほん案小説に「怪美人」というのがあるが、見物してみるとあれではない、もっともっと荒唐無稽で、奇怪至極の筋だった。でもどっか、涙香小史を思わせるところがないでもない。今でも貸本屋などには残っているようだが、涙香のあの改版にならない前の菊判の安っぽい本があるだろう。君はあれのさし絵を見たことがあるかね。今見なおすと、実になんともいえぬ味のあるものだ<sup>3</sup>。

乱歩がかつて涙香作品に対して抱いた「なまぬるい感じ」は、郷愁を伴う好ましさを感じさせるものとなっていた。また、昭和九年五月から翌年五月まで『講談倶楽

部』に連載された「人間豹」は、「涙香の「怪の物」と槐多の「悪魔の舌」の着想を借りている」（『動物怪談』<sup>4</sup>）と述べているように、少年時代に熱中した涙香作品を、自身の小説へと、組み込んでいくようになる。特に「白髪鬼」（『富士』昭和六年四月〜昭和七年四月）や「幽霊塔」（『講談倶楽部』昭和十二年三月〜昭和十三年四月）は、涙香の翻案を意識して再構成されたものであることが、伊藤秀雄氏<sup>5</sup>や小松史生子氏<sup>6</sup>、堀啓子氏<sup>7</sup>等によって論証されている。この他、乱歩は明治二十年代の翻訳探偵小説の流行作家として、涙香を随筆などではしばしば取り上げている<sup>8</sup>。

乱歩がいつ頃から涙香作品を収集し始めていたのかは定かではないが、書架には多数の涙香本が見られた。また乱歩の周囲でも、涙香作品に注目していた人物がいた。そのひとりが野村胡堂（長一）である。

乱歩と胡堂の出会い、大正十四年に遡る。乱歩の作品はそれまで『新青年』のみを発表の場としていたが、同年四月、『写真報知』に「算盤が恋を語る話」と「日記帳」の二作が掲載されることとなった。当時、報知新聞の文芸部長であり、雑誌『写真報知』の編集監督も兼任していたのが、野村胡堂であった。

大阪に住んでいた乱歩は同年十一月三日、報知新聞社に

赴き、応接間で初めて胡堂と対面した。胡堂はそこでの対話について、「何んかのきっかけで、話題は黒岩涙香の作品に及んだことを記憶している。その頃から私は涙香の話術の面白さを誰彼となく話していたものらしい」（『乱歩氏と私と』<sup>10</sup>）と記している。先述のように、四ヶ月前の『写真報知』には、涙香に触れた「百面相役者」が掲載されており、そこから共通の関心へと、話題が移ったと考えることもできよう。この時胡堂は、探偵小説を書くならば涙香作品を研究すべきだと主張し、その魅力について「話術は古今独歩で、筋を面白く運ぶこと、人物を浮出させること、複雑な事件を書きこなして行く技術に至っては、全く比類もない」（『涙香に還れ』<sup>11</sup>）と語ったという。

胡堂は読書に没頭する少年であった。特に思い入れの強い作品は、ビーコンスフィールド著、福地桜痴・塚原靖訳『昆太利物語』（上・中・下巻 明治二十一年〜二十三年刊）であった。本作は『東京日日新聞』連載中<sup>12</sup>に北村透谷が読み、主人公と自分を重ね合わせた作品として知られている<sup>13</sup>。

同書の主人公、コンタリニー・フレミングは継母に育てられるという疎外感を味わいつつも、生まれながらの高い身分と優秀な頭脳、鋭い弁舌と行動力で以て、理想的な女

性と自分に相応しい職業を追い求めていく。この物語は、少年の夢想をかきたてる設定と展開であり、胡堂少年も熱中した。しかしその結果、学業が疎かになり、成績が悪化したため、父親に取り上げられてしまった。最後まで読み切ることができなかった胡堂は、その後、約半世紀もの間、続きを探し続けるという執着を見せる。

この『昆太利物語』に対して、胡堂は「岩窟王などと同類項の冒険痛快小説」（『半世紀の執念』<sup>14</sup>）と、やはり少年時代に読んだ涙香作品に喩えて、その魅力を語っている。涙香作品が、胡堂の読書基準の一つであったといえよう。

胡堂の涙香嗜好は、実弟の命名にも現れている。

「私が十二歳の時生まれた実弟に、私の意見で涙香の小説に出て来る、善玉の名前を付けろと言いつし、父親が大いに賛成してくれ」（『小学生の思い出』<sup>15</sup>）たことから、『如夜叉』（明治二十四年刊）に登場する「耕次郎」と決まった（書簡番号〇六参照）。この『如夜叉』は胡堂が最初に読んだ涙香作品でもある<sup>16</sup>。

このような幼少期の思い出と共にある涙香作品を、胡堂は収集していた。そして第二次世界大戦中に、同じ趣味を持つ乱歩と、コレクションの不足部分を補うべく、幾冊かを交換したことがあった。

大戦中の乱歩氏は自宅に籠って、静かに写経などをしていたようである。私は頻繁に手紙を往復して気を紛らせていたが、フトしたことからお互に涙香作の蔵書目録を交換し、有無相通じようではないかということになり、乱歩氏の蔵書を十冊位は貰った筈であるが、私から差上げたのは僅か三、四冊に過ぎなかったと思う。

（「乱歩氏と私」前出）  
この涙香本の交換に関しては、末國善己氏などにも言及があり<sup>17</sup>、また、乱歩が譲渡を申し出た書名についても、昭和十七年四月二十二日に横溝正史に宛てた書簡（書簡番号〇七参考資料）や『野村胡堂・あらえびす来簡集』（岩手県紫波町 平成十六年）などから、ある程度知られていた。しかし、具体的に両者がどのような作品を交換していたのか、その経緯や詳細については断片的にしか伝わってこなかった。

本稿では従来の空白部分を埋めるものとして、平井家所蔵・立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター寄託資料の胡堂書簡と、野村胡堂・あらえびす記念館所蔵の乱歩書簡<sup>18</sup>から対応関係にあるものを十通、翻刻掲載する。

両書簡には自著に対する見解や、譲渡対象となった涙香本に関する詳細などが記されている。また、互いを意識し

たコレクターとしての矜持も垣間見ることができる。乱歩は和本<sup>19</sup>や洋書の、そして胡堂は武鑑や俳諧柳多留、レコードの収集家としても知られている。書簡に記された両者の収集基準は、今後の乱歩研究・胡堂研究の一助となるう。

なお、十通の内、二通だけは昭和十年の往復書簡であり、当時盛んであった本格・変格探偵小説論を受けている（書簡番号〇一・〇二）。

同論は、甲賀三郎が「探偵小説講話」（『ぷろふいる』昭和十年一月〜十二月）で提唱した探偵小説の分類であり、種々の論議を呼んだものである。甲賀の分類は、以下のよう認識されている。

探偵の名に象徴される人物、すなわち司法関係者や私立探偵、あるいは犯罪研究者（しろうと探偵）たちが当面する謎を解き明かすプロセスを重視した、論理的で知的な読物が「本格探偵小説」。そして、謎解き以外の要素に一編の主たる魅力を担わせた「変格探偵小説」（谷口基『変格探偵小説入門——奇想の遺産』岩波書店 平成二十五年）

特に変格探偵小説は、「謎解きよりも怪奇幻想性やエロ・グロ、SF的要素などに比重をおく」（同前）ものとされ

た。

胡堂は同年十二月十日の書簡で、出版されたばかりの自著『銭形平次捕物帖』（千代田書院 昭和十年）を指して「私の変格物で見当の違ったものですが、一つでも読んで下されば幸いです」（書簡番号〇一）と乱歩に書き送っている。同書の序文でも「私の銭形平次は決して本格的な探偵小説ではない。が、その代り、あくまで常識の世界を扱ったものであると断っており、胡堂が本格・変格探偵小説論を意識している様子がうかがえる。

胡堂の書簡に対し、乱歩が「変格との御言葉ですが、舞台が時代といふだけにて、構成はやはりドイルの道を行くもの故、無論、本格に属するものと存じます」（書簡番号〇二）と反応しているのは、胡堂の「変格物」という言葉に、自作を卑下する語調を感じたためだろう。「変格探偵小説」という銘を、日本で最初にうたれた「乱歩も、そこには「軽蔑の意味」が含まれていると認識していた。「私は変格の銘をうたれてあまり愉快ではなかった経験から、変格という呼び方なるべくしないように心がけている」（「二拔打座談会」を評す）<sup>20</sup>とその語句に敏感であった。乱歩の書簡には、「変格」という言葉への抵抗を早くから抱いていたことや、同じ「変格探偵小説」家としての「烙印」を押され

た者に対する励ましを見ることができる。

捕物小説が探偵小説の亜流であるという劣等感を抱きつつあった胡堂も後年は、それが文学的に低俗なものではないという自信を持つようになる。

捕物小説は、たゞもう卑俗な、全く無価値な文学であるかの様に読まぬうちから、或ひは一寸めくつて見て、軽侮する傾向が強いが、これは如何？ 捕物小説はも一度見なほされるべきではないか。それよりも現在、捕物小説が圧倒的に大衆の支持を受けてゐる事実を何と見ればよいのか。

捕物小説の構成上の制約は実に大きい。(中略)ただ、人情の機微の中にトリックが生れ出なければならぬ。一切の「非人間」は活躍の余地なく、ただ「人間」そのものに關聯してトリックが生れねばならない。ここに、香り高い「人間の文学」としての捕物小説の意味がある。或ひは、こんなことを云つたならば叱られるかも知れないが、捕物小説は、近頃日本に於ける一部の所謂推理小説より、文学としてはより高らかな段階にあるものではないかと、聊か自負しても見度くなるのである。

(「捕物小説について」<sup>21</sup>)  
かつて受けた変格探偵小説という「輕蔑」への憤りが、

この論調の根底にあることは間違いない。そしてそれへの反駁を私的な書簡の中だけでなく、「捕物小説は日本特有の探偵小説の型である」(「捕物帖談義」<sup>22</sup>)と、探偵小説家として確固たる地位を築いていた乱歩が事毎に公言することによって<sup>23</sup> 胡堂はトリックと余情、それが捕物小説独特の価値であると確信していった。

本格・変格探偵小説についての意見交換を行った七年後の昭和十七年に、胡堂と乱歩は黒岩涙香作品を譲り合う。

乱歩は重複していたものとはいへ、七点もの作品を胡堂へ気前よく渡し(書簡番号〇九・一〇)、胡堂も乱歩が望んだ涙香本二点を、手間を惜しまず古書店で探し出し、送っている(書簡番号〇八)。ここには同好の士への好意が現れている。

胡堂は、「些やかなことでも、人というものは自分に寄せられた好意は、なか／＼に忘れ難いものである」(「文壇交友帖」<sup>24</sup>)と語る人である。書簡からも垣間見えるこの爽やかな誠意が、互いの親交を深めていったのだろう。

#### 〔凡例〕

野村胡堂書簡は平井家所蔵・立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター寄託資料のものを、江戸川乱歩書簡は野



十二月九日 府下砧村宇奈根七九五 野村胡堂

〔宛先〕豊島区池袋三丁目一六二六 江戸川乱歩様

〔時期〕消印「淀橋10/2.10/后48」

〔注釈〕i 千部限定本『石榴』（柳香書院 昭和十年）を指し、胡堂記念館に一冊所蔵されている（佐藤昭八編『野村胡堂旧蔵図書・雑誌目録』野村胡堂・あらえびす記念館 平成十七年）。この『石榴』には乱歩自身が当時探偵小説の代表作と考えていた「石榴」「陰獣」「心理試験」が収められ、「純黒の西洋クロスで、背中だけに余り大きくなく題名と著者名が金文字ではいつて」おり、「上部の截断面にはセピアの色を塗り、磨きがかけてあ」った。乱歩は内容、装訂ともに満足し、「著書のうちで、最も気に入っている」と語っている。（江戸川乱歩『探偵小説四十年（上）』江戸川乱歩全集13 講談社昭和四十五年） ii 「名馬罪あり」「平次女難」「兵糧丸秘聞」「綾吉殺し」「血潮と糠」「幻の民五郎」「歎きの菩薩」「江戸阿呆宮」「くるひ咲」「濡れた千両箱」「露路の足跡」「血潮の浴槽」「謎の鍵穴」「傀儡名臣」を載録した『新篇銭形平次捕物控』（千代田書院 昭和十年）を指す。

〇二 乱歩書簡（昭和十年十二月十二日 封書40048）  
御高著と御ハガキ拝受致しました。

銭形平次は日頃もちよい／＼拝読して居りますが、美本にて先づ冒頭的一篇「拝読しました。正常平易の御名文、敬服の至りません。

変格との御言葉ですが、舞台が時代といふだけに、構成はやはりドイルの道を行くもの故、無論、本格に属するものと存じます。

とりあへず、御礼申し上げます。あとの数篇はこれよりゆる／＼拝見致さうと思つて居ります。

野村胡堂様

江戸川乱歩

〔宛先〕府下砧村宇奈根七九五 野村胡堂様

〔時期〕封筒裏「十二月十二日」及び『野村胡堂・あらえびす来簡集』参照

〔注釈〕i 「名馬罪あり」を指す（『新篇銭形平次捕物控』千代田書院 昭和十年）。

〇三 乱歩書簡（昭和十七年四月十日 封書40049）

拝啓 昨夜は失礼いたしました。其節御約束せし拙著、左

記の別便御送り致しました。御笑納下さいませ。

#### 平凡社全集<sup>i</sup> 九冊

初版金色表紙本は自分用の外、残り有らず。再版本の方ですが、それも調べて見ましたところ、有るものは何冊もあり、無きものは全く欠本といふ具合にて、九冊しか揃はず残念ですが、一応これにて御勘弁下さい。

初版本は十三冊、再版本は十二冊ですから、九冊では三冊不足してゐるわけです。併し冊数や表紙は違ひますが、初・再とも、小説は全く同じです。初版本から随筆を抜いたものを十二冊に纏めたわけです。その異同、その他は、新潮社選集第十冊巻尾の拙著目録御覧下されば、詳しく記してあります。

（頭書「不足の三冊は湖畔亭事件、一寸法師、黄金仮面です」）

#### 新潮社選集<sup>ii</sup> 十冊

これは出版が新しいので、よく揃って居りました。この選集は全集以後の講談社物長篇を主としたものですが、半分ほどは平凡社全集と重複して居ります。その事もこの選集第十巻々末の拙著目録に詳し。

右両集とも読むに足るものは極めて少数にて、長篇は殆んど全部、実は御覧願ひたくないヒドイものばかりで、汗顔

に堪へませんが、御約束致せし事故、御送りするわけです。その申訳といふわけでもありませんけれど、別に従来の拙著中、やゝ氣に入つてゐる小説集二冊と、評論めいた随筆集一冊<sup>iii</sup>と同封しました。この三冊は献本の形式にいたしておきました。（全・選集の方は、御名前を書入れる事はゞかられる代物なので）

御差支ありませんでしたら、御高著、捕物全集御恵与下さらば幸甚です。送本御知らせ旁々右まで。 草々

四月十日

江戸川乱歩

野村胡堂様

〔宛先〕 杉並区上高井戸三ノ八〇八 野村胡堂様

〔時期〕 封筒裏「四月十日平井太郎昭和十七 東京市豊島区池袋三ノ一六二（昭和）以下は印刷。以下同）」

〔注釈〕 i 昭和六・七年に平凡社から刊行された『江戸川乱歩全集』（全十三巻）と、昭和十年、同社刊行の『江戸川乱歩傑作選集』（全十二巻）を指す。前者の各巻掲載作品リストとそのあらすじを記した内容総覧は、横溝正史の執筆。またこの全集は、乱歩の発案で黄金仮面に扮したチンドン屋行列や広告気球などによる宣伝を行った。その効果もあり「行詰ッテキタ平凡社ヲ救フ結果」



となるほどの売れ行きを見せた。後者は全集の随筆・翻訳を除いた改題再版ものであり、頭書にある不足分は一・三・十二巻に相当する（江戸川乱歩『貼雑年譜』講談社 平成十六年）。ii 昭和十三・四年に刊行された『江戸川乱歩選集』を指す。各巻巻末には「探偵小説十五年」が連載された（『貼雑年譜』）。iii 昭和十七年までに出版された乱歩作品のうち、評論集『鬼の言葉』（春秋社昭和十一年）と小説集『幻想と怪奇』（版画荘 昭和十二年）に乱歩の献辞（「野村胡堂様 著者より」）が見られる。これらの胡堂旧蔵書（胡堂記念館蔵）は献本三冊の内に該当すると思われる。

○四 胡堂書簡（昭和十七年四月十一日 封書）

拝啓 先夜は失礼いたしました。

本日御手紙と御著書の小包四個拝受、早速の御恵にて恐縮いたしました。御深切有難く身にしみて御礼申し上げます。実は平凡社本、博文館本、その他御著の見つかり次第集めて居りましたが、なか／＼埒あかず、歯痒いことに存じて居りましたところ、纏めて御送り下され、本当に感謝いたしました。心静かに拝読いたします。新潮社本には私の知らないのが数篇交って居り、新しい興奮を感じます。

「銭形平次百話」九冊<sup>i</sup>、「百話以後」三冊<sup>ii</sup>、外に二冊の捕物集を二つの小包にしてお送申し上げます。「池田大助」は譚海へ連載したもので、子供／＼したのですが、兎も角添へて置きました。他にもまた一二冊ありますが、お目にかけるほどのものではありません。普通の大衆文芸ですと、数十冊ありますが、これは御覧になるやうなものではなく、わざと遠慮いたしました。

御著のうち、全集に御署名のなかったのが惜しかったと思ひます。御遊びにでもお出の折を待つて、改めて署名して頂き度いと存じます。（帝都<sup>v</sup>の高井戸下車、浴風園<sup>v</sup>の手前隣です。）

私は蒐集が好きで、いろ／＼のものを集めて居りますが、進んで集めた本は、柳樽の元版と武鑑<sup>v</sup>と、現代のもでは谷崎潤一郎全集と鏡花全集と涙香の蒐集<sup>v</sup>だけ。これに新に二つの貴著全集を加へるのは嬉しいことです。

先は右御礼まで。

早々敬具  
野村胡堂

十七年四月十一日  
江戸川乱歩様

〔宛先〕 豊島区池袋三ノ一六二六 平井太郎様

〔時期〕 消印「東京中央」17.4.11/ 后812

お

五 移 日 只 永 〃 乙 し ず し 乙

女日  
子決  
乙  
与  
着  
書  
の  
...  
包  
四  
個  
友  
友、  
子  
車

の け 息 づ 忍 痛 い 左 し 可 し 外  
け 深 切 有 難

、 身 3 7 2 15 18 9 2 4 7 12

實作至昭北分、  
得文館分、  
至分池內署分

[illegible]

增外 9月  
送外  
少  
2  
印  
2  
海  
才  
2

上  
与  
子  
  
彈  
の  
は  
ま  
ま  
ま  
  
有  
者  
子  
を  
知

心静  
面淡  
氣和  
神清

一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

考第之解

[illegible]

升  
ハ  
ホ  
フ  
ヘ  
ニ  
フ  
リ  
ロ  
レ  
ル  
ヲ  
カ  
キ  
ク

子  
 也  
 大  
 師  
 江  
 魯  
 向  
 一  
 多  
 教  
 し  
 ん  
 か  
 り  
 じ

お  
し  
は  
な  
り  
が  
、  
わ  
た  
し  
の  
一  
人

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、

83 10 8 07 1 2 13 2 9 5 16 07 1 8 2 2

著者の  
上巻の  
文藝的  
考察と  
その  
一冊の  
あり方  
を  
論ずる  
こと

---

五卷一九一四

河第913号第21卷第1号

い か う へ と ぬ ひ す ま  
あ あ い う え お の

和  
乙  
婚  
フ  
乙  
  
明  
の  
乙  
署  
知  
！  
乙  
信  
々  
々  
乙  
和

活風園の千載一見

[illegible][illegible]

現代の  
一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

[illegible]

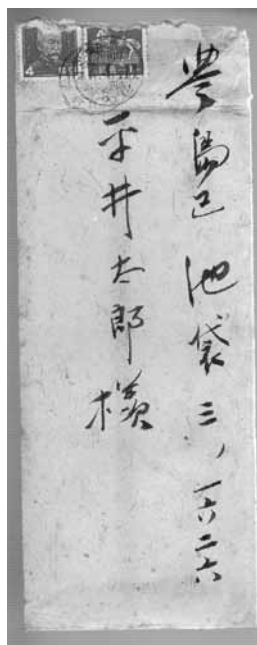
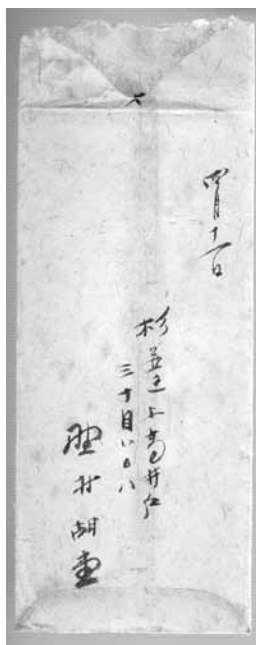
子夜

七  
十  
五  
元  
二  
角  
分

丁巳年

Handwritten signature: [Illegible]

---



〔注釈〕 i 『銭形平次捕物百話』全九卷（中央公論社 昭和十三・四年）を指す。 ii 『銭形平次捕物控 百話以後』全四卷（学芸社 昭和十六・七年）を指す。但し四巻は昭和十七年十月発行のため、乱歩に贈与したのは当時既刊の三巻までとなる。 iii 雑誌『少年少女譚海』（博文館）に昭和十一年一月から十二年十二月まで連載され、『池田大助功名帖』として学芸社から昭和十六年に刊行された。 iv 昭和八年、帝都電鉄株式会社（今の京王電鉄株式会社）によって敷設された井の頭線のこと。 v 設備の整った養老院であり、胡堂は和歌の選評を頼まれ、御礼に見事な菊の花束を貰うなどの交流があった（野村胡堂『胡堂百話』中央公論新社 平成十九年）。また胡堂死去の翌日、昭和三十八年四月十五日の『朝日新聞』にも浴風園と胡堂との付き合いが伝えられており、たとえば胡堂が戦後まもなく「おハギが食べたい、という老人たちの話」を聞いて一万円を寄付したという浴風園職員の話も掲載されている。 vi 胡堂の収集した『柳多留』初編（第百編と『武鑑』四百八十二冊は昭和三十七年十二月、東京大学史料編纂所に寄贈された（はじめに）『野村胡堂旧蔵図書・雑誌目録』）。その経緯は進士慶幹「武鑑と『胡堂文庫』（『日本歴史』昭和三十八年二月）に詳しい。

進士によると胡堂が武鑑の収集に努めるようになったのは関東大震災後のことであり、昭和三十四年頃まで続けられたという。

〇五 乱歩書簡（昭和十七年四月十六日 封書40050）

拝復 微恙の為、一兩日御返事おくれ申訳ありません。

御高著小包二個と御手紙有難く拝受。厚く御礼申し上げます。御手紙にありました鏡花、潤一郎、涙香の御蒐集は小生も全く同感にて、明治後の小説家にて深く興味を持つもの小生と雖も、右三者に、或は柳浪を加ふる位のもので。不思議に好みの一致してゐる事を愉快に存じました。右の内、涙香丈けは、小生も貸本屋本ながら大部分集めて居ります。柳田泉氏「随筆明治文学」所収「黒岩涙香著訳小説目録」によれば、書物となつてゐるもの六十余部の内、元版本未入手のもの、左の十一部です。

二葉草（彩霞園柳香の名にて著す）、無惨（後に「三筋の髪」と改題再出）、活地獄、涙香集、非小説、捨小舟（三冊本の内、中篇のみ所持）、女庭訓、野の花（二冊の内前篇のみ所持）、花あやめ、暗黒星、今の世の奇蹟

右の内、活地獄以下は凡て青少年時代に一読、或は再読せし事あり。又、無惨は柳田氏より借りて一読。未読のもの

は二葉草のみですが、本を集め出したのは近年の事ですから、これ丈けがまだ揃つてゐないといふわけです。随つて集まつて居る本も貸本屋ものの汚本ばかりですが、中には二重三重に所持せるものもあり、若しこの内御入用のものもあらば、御送り致すべく、左に二重にあるもの記して見ます（凡て汚本です）。

人耶鬼耶、有罪無罪、幽霊、片手美人、塔上の犯罪、執念、玉手箱、如夜叉、鉄仮面（三冊本）、何者、人の運（二冊本）、女退治、武士道（二冊本）、露国人、雪姫、幽霊塔（三冊本）、噫無情（二冊本）、一夜の情、山と水（二冊本）

御入用のものあらば、御申越し下さい。寄贈致します（元版本と申すのみにて、必ずしも初版本ではありません）。尚、貴蔵中、前掲小生未入手本にて御不用のもの、若しありましたら、御寄贈下さらば幸いです。御礼旁々右まで。

四月十六日

江戸川乱歩

野村胡堂様

その内、一度御蒐集拝見に御邪魔致したく存じ居候

「宛先」 杉並区上高井戸三ノ八〇八 野村胡堂様

「時期」封筒裏「四月十六日平井太郎昭和十七東京市豊島区池袋三ノ一六二六」

〇六 胡堂書簡（昭和十七年四月十九日 封書）

拝啓 御手紙嬉しく拝見しました。

鏡花は中学の四年頃から凝り出し、かなりの蒐集もありましたが、新聞記者になった大正の初年から中止し、今は四五冊の元版本と全集を持つてゐるだけです。そんなことで岩波の全集の月報へ何んか書けと言はれて居りますが、ツイ着手し兼ねて居ります。

谷崎潤一郎は同窓ですが、口をきいたのは一度だけ。蒐集は元版本、ほんの二三冊と改造社の全集以外には大したものありません。

涙香は長い間心掛けて居りますが、恥かしいほどの小蒐集です。元版本は固表紙四六版が五冊、菊版口絵本が十八部二十数冊、あとは複製本で、扶桑堂本、明文館本など。これは二十二三冊、その他は春陽堂の袖珍本と言った心細さです。全くお話になりません。

そんなわけで、頂いてもお返しに差上げるものが無く、（元版本の重複などは一冊も無いのです）極りの悪いことです。

お示しの重複本のうちで、私が元版で持つて居るのは、人耶鬼耶、有罪無罪、鉄仮面、女退治、山と水等ほんの数種に過ぎません。それは併し扶桑堂の後版本で我慢いたしますが、たった一冊「如夜叉」だけは長い間捜して居りましたので、御割愛下されば有難いと存じます。

それは、私の読んだ涙香物の最初の本で、あの中へ出て来る「耕次郎」といふ名前をかりてつけた弟が私より十一歳年下ですから、あれを読んだのは多分私が十二才の時だったでせう。その弟が大きな親爺になって、孫が半ダース位あるのを見ると今昔の感です。

「三筋の髪」といふのは十四五才の時読んだ切りですが、あれだけは涙香の創作だったと思ひます。「二葉集」といふのは、私も見たことはありません。

「三筋の髪」を四六版、固表紙の涙香集といふのに載せてあるのを見たことがあります。（後の三五版の涙香傑作集ではありません。）

「暗黒星」を一度本郷の本屋で見付け、其時は何んかの都合で買ひ兼ね、四五日経って行つて見ると、売った筈は無いといふのにどうしても見当らず、そのまま手に入れ兼ねたことがあります。四五年前のことですが、今でも惜しいと思つて居ります。尤もあれは杉居松翁（松葉）と共訳で、









〔宛先〕 豊島区池袋三ノ一六二六 平井太郎様

〔時期〕 消印 □/17.4.19/前04/□

〔注釈〕 i 野村胡堂は明治三十七年九月に第一高等学校仏法科に入學。『第一高等学校一覽』（東京大学駒場博物館蔵）明治三十八年九月末調の生徒姓名表によると、「第一部二年三之組 仏法科仏文科（三十六人）」に「野村長一岩手」と記されており、一學年下の「第一部一年一之組 英法科文科（四十人）」に「谷崎潤一郎 東京」の名前が見える。なお明治三十七年の『寄宿寮記録』（同館蔵）には「九月廿七日（中略）午後八時ヨリ九月總代會本學期總代氏名左ノ如シ」として「中寮」「二、野村長一」とあり、入學早々、胡堂は寮の室長となつた。ii『讀書と文獻』は昭和十六年十二月から刊行された。各界の著名人から「目下探求中の書籍」「最近興味深く読んだもの」を募るコーナーなどもあり、昭和十七年五月には胡堂の投稿が掲載されている。特に「目下探求中の書籍」として、「柳樽」の原本約百二十冊は集めたが、あと三四十冊がなかなか集らぬ。異本まで完備させることは容易ではない。私の一生を賭けなければなるまい」と記されており、当時の柳多留収集状況と、その熱意を知ることができる（書簡番号〇四参照）。ただし、この時までの

「探求書欄」に、乱歩の全集を求める投書は見当たらない。iii 昭和十七年四月十九日『朝日新聞』朝刊に、十八日午後二時東部軍司令部発表の声明として「午後零時三十分ごろ敵機數方向より京浜地方に來襲せるも、我が空地兩航空部隊の反撃を受け、逐次退散中なり、現在までに判明せる敵機追撃數は九機にして我が方の損傷輕微なる模様、皇室は御安泰に互らせらる」との記事がある。

『東京日日新聞』の同日夕刊にも同文が載るが、同日朝刊には空襲下の人々の様子が詳しく記されている。しかし、空爆された場所については伏せ字となっており、北部は荒川付近に焼夷彈が落とされ、西南部にも被害があつた以外の詳細は不明である。ただし、当時馬込に住んでいた山本周五郎の日記によると、五反田辺りに煙が上がつたとある。このほか、麻布、荒川放水路も空爆されたという噂を耳にしている。周五郎はこの空襲に対して、「初めて敵機を見た、恐怖を感じなかつたと云つては嘘になる。然し恐怖よりも闘志の方が強かつた事は事實だ」と、胡堂にも共通する非日常の興奮を書き出している（『山本周五郎 戦中日記』角川春樹事務所 平成二十三年）。

〇七 乱歩書簡（昭和十七年四月二十二日 封書4051）

御手紙有難く拝見致しました。先づ申上げなければならぬのは、前便拙柬に涙香元版と記せしは、明治時代印刷のザラ紙、内活字、銅版風挿絵本を引くるめての意味にて、同じ本にて版元の違ふものも区別せず偏りに元版と申せしわけです。御手紙により版元の区別も必要と存じ、一応、表にして見ましたところ、小生所持資本屋本にては、明治二十四、五、六年頃を境としてその以前は大川屋本最も多く、弘文館、金桜堂、金松堂、薫志堂などの本にて扶桑堂本はありませんが、右時期以後出版の本は扶桑堂本最も多く、明治三十年代以後は全部が扶桑堂本です。後期程小生所持、重複本も多いのに、悉く扶桑堂本なる点、又柳田氏涙香著書目録の印行年月日と一致する点より考へ、三十年代以後は扶桑堂本を元版本と考へてよいのではないかと存ぜられますが、御意見如何でせうか。

次に、小型厚表紙本と菊版本と何れが先なるやの問題ですが、小生小型本にて所持せるは、美人の獄、劇場の犯罪、片手美人、妾の罪の四冊に過ぎませんので、充分の調査は困難ですが、其内菊版初版本と重複所持せるもの、美人の獄を比較するに、両者とも版元は金桜堂、今古堂の連名にて、出版年月日も二十三年八月二十五日と全く同じになつ

てゐます。是を以て全部を推す訳には行きませんけれども、斯く同時出版の例ありとせば、小型本、菊版本何れが先とも申し難いやうです。併し本の装幀としては小型本の方、感じよろしく、出来るなれば、小型本の出でゐる丈け集めたいやうに考へますが、なか／＼むつかしい事と存じます。柳田氏の目録には版元や小型菊判の区別が記してありませんので、小型本で出てゐるもの何になるやも小生には全く不明です。何年頃の分まで小型本あるや御承知でしたら御教へ願ひ度く存じます。

さて、大変申訳ない事があります。如夜叉だけは是非ほしいとの御手紙にて無論御送りするつもりのところ、表にしてみまして分つたのですが、従来は如夜叉を一冊本と誤解して居り（柳田氏目録に一冊本と誤記せる為）それが小生の書棚に二冊あるので、重複所持と思込んでゐたのですが、右表を作る際、全本奥附を調べし結果、如夜叉は上下二冊本なる事判明、重複してゐない事が分つたのです。かういふ間違ひは如夜叉だけにて、それが偶然唯一の御希望本なりし事実には申訳ない次第と、御詫びいたします。これは全く貸本屋の汚本なる為にて、表紙に上下など記してない為、右の誤解を生じたわけですが。

そこで、右表にて判明せる重複本の版元、出版年月を左に

記し、この内より御入用のものの御選びを願ふ事にいたします。小生の元版と申せし意は、前記の通りにて、左記は必ずしも元版本でないやうにも思はれますので、為念記して御考へを伺ふわけでもあります。左記には御手紙に元版御所持とありし、人耶鬼耶、有罪無罪、鉄仮面、女退治、山と水は省きました。

法廷の美人 ○薰志堂 二十二年九月 再版

弘文館 三十五年八月 別版

幽霊 ○井上勝五郎出版 二十三年一月 初版

弘文館 三十五年七月 別版

(「血汐の手形」合収本)

同 同

片手美人 ○岩本五一(大川屋) 小型

二十三年二月 小型本 初版

○大川屋書店 菊三十六年四月 三版

同 同 四十年十一月 十五版

✓塔上の犯罪 ○薰志堂 二十八年十二月 再版

同 同 同 同

同 同 同 同

妾の罪 ○大川屋 小型二十三年九月 初版

○大川屋書店 菊四十一年六月 十版

✓執念 ○扶桑堂 二十六年八月 三版

同 同 三十七年四月 五版

玉手箱 ○鈴木金輔発行 二十四年五月 初版

大川屋 三十年三月 三版

✓何者 ○金松堂 二十五年十月 初版

同 同 二十七年三月 三版

✓人の運 ○扶桑堂 (前) 二十七年十一月

(後) 二十八年月 初版

同 同 (前) 三十年十月

(後) 三十二年一月 三版

同 同 (前) 同 (後) 奥附を欠く

✓武士道 ○扶桑堂 (前) 三十年十二月

(後) 三十一年四月 初版

同 同 (前) 三十二年十月 再版

(後) 右同 初版

✓露国人 ○扶桑堂 三十二年一月 初版

同 同 奥附を欠く

心と心 ○扶桑堂 三十二年六月 初版

同 同 同 同

✓雪姫 ○扶桑堂 三十六年六月 初版

同 同 同 同

✓幽靈塔

○扶桑堂（前）三十四年一月

(後) 同年五月

(続) 同年九月初版

同  
同  
同  
同  
同

同  
同  
同  
同  
同

噫無情

○扶桑堂（前）四十一年十月 十版

（後）四十一年六月 七版

同 (前) 三十九年三月 四版

(後) 奥附を欠く

✓ひと夜の情

○扶桑堂 大正四年六月 初版

同  
同  
同

以上です。多くは表紙の全からぬ汚本にて、頁の切れてゐるものもあります。手にするものも不衛生の感じあるものも多いのですが、右の内、朱丸印の外はどれでも御入用なれば御贈り致します。斯く詳記いたしますのも、散佚勝ちの淚香本は、今にして同好のものがなるべく多く集め置くべきと存じ、貴書庫にも出来る丈け御集めおき下されば何かの折の御参考ともなるべしと存ずる為です。甚だ汚本なれども、無きにはまざるべきか。

右記の外、小生初版本（と覺しきもの）所持せるものは、真暗、決闘の果、美人の獄、劇場の犯罪、大盜賊、指環

大金塊 女退治、人外境（中のみ初版）、絵姿、古王宮  
人の妻、破天荒、郷土柳子の話、八十万年後の社会、  
のみにて他は凡て元版の重版本です。

人耶鬼耶、有罪無罪は共に元版三部重複所持せるも、皆重版です。

御多用中つまらぬ事を詳記いたし、時間のおさまたげいたし、申訳ありません。重複本、右年月のみにてよろしくば、全部御希望下さっても少しも迷惑ならず、却つて喜ばしき次第ですから御申越し下さいます様。

四月二十二日

江戸川乱歩

野村胡堂様

追伸 読書と文献は毎号来て居りますので、多くは目を通して居ります。最近号には、拙著探求二ヶ所にありし様、記憶します。内一つは定価一円の全集本を各冊一円半にて求むとあり、之は違法ならずやなど、考へたわけです。

月末までは一寸忙しい事あり。来月いつかの日曜日に御邪魔致したいと存じて居ります。

〔宛先〕 杉並区上高井戸三ノ八〇八 野村胡堂様

〔時期〕封筒裏「四月二十二日平井太郎昭和十七東京市

豊島区池袋三ノ一六二六」

「注釈」書名上のチェック印は胡堂書き入れと思われる。書簡番号〇八（胡堂書簡）の譲渡希望書名とその多くが一致する。i「如夜叉 全一冊 都新聞 明治二十四年十一月二十六日単行、原本ボアゴベイ『彫像師の娘』。同時に上下二冊も出しといふ。」（柳田泉「黒岩涙香著訳小説目録」『随筆明治文学』春秋社 昭和十三年）

〔参考資料〕

昭和十七年四月二十二日附 横溝宛乱歩書簡（横溝正史『横溝正史自伝的随筆集』角川書店 平成十四年）

「此程野村胡堂氏とよく会にて会ふので、同氏涙香本を集め居られる事分りお互に不足本をしらべて、重複本あらば交換する事とし今日もその手紙をしたわけですが、小生は案外に重複本多く、野村氏に上げて余程残る様に思はれますので、貴兄ともお互の不足本知らせ合ひ、双方ともなるべく欠本を少くしておく方よろしきかと存じ左に小生不足本と重複本を記して見ます。柳田泉氏「随筆明治文学」所収涙香著訳目録は今のところ最も完全なるものと思ひますが、涙香作の本になってゐるもの右目録によれば六十二、三部ほど、その内小生書棚に不

足せるは左の十二部です。

二葉草 無惨 三筋の髪 活地獄 涙香集 非小説 捨小舟（中篇だけは所持） 女庭訓 野の花（前篇のみ所持） 花あやめ 暗黒星 今の世の奇蹟

小生重複して所持せるもの

法庭美人（二部） 人耶鬼耶（三部） 有罪無罪（三部） 幽霊（二部） 片手美人（二部） 塔上の犯罪（三部） 執念（二部） 玉手箱（二部） 鉄仮面（二部） 何者（二部） 人の運（三部） 女退治（二部） 武士道（二部） 露国人（二部） 心と心（二部） 幽霊塔（三部） 噫無情（二部） ひと夜の情（二部） 山と水（二部）

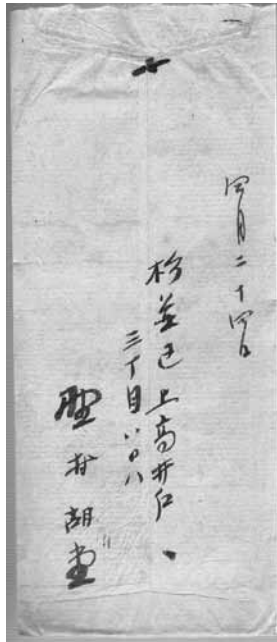
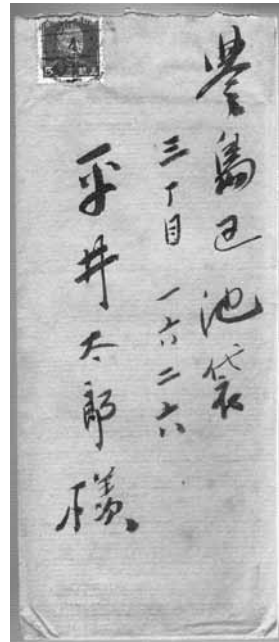
この内二部丈けのものは或は野村氏が先に希望して来られるかと思ひますが、三部のものは御入用なれば必ず差上げ得るわけです。御申越し下さい。又小生不足のものの内重複御所持のものあらば是非御贈与下さい。」

〇八 胡堂書簡（昭和十七年四月二十四日 封書）

拝啓 御手紙拝見。涙香本御割愛の御厚意有難く存じます。私から何人にもお酬するものが無いので、発奮して半日、本屋あさりをいたし、埃の中をかき廻しましたところ、思はぬ獲物がありましたので、「捨小舟」三冊と「活地獄」

一冊、小包郵便にてお送申し上げます。あなたのお書きに  
 なった御入要の本で手に入れたのはたつたこれだけです  
 が、私の方はボール表紙を更に五六冊かへることが出来ま  
 した。(そのうち梅花郎と人耶鬼耶は重複)  
 涙香本の版元はかなり変ったやうで、前記、梅花郎と人耶  
 鬼耶はいづれも四六版のボール表紙ですが、表紙の絵も版  
 元も違ひます。人耶鬼耶の奥附で見ると、廿一年に稲村正  
 吉名儀で小説館で出し、廿三年に野村銀次郎名儀の金桜堂  
 に版權を譲渡して居ります。こんなことが頻繁に行はれた  
 のでせう。  
 その他、氣の付いたことは、「此曲者」といふのを手に入れ  
 ましたが、これは「塔上の犯罪」の前名ではないかと思ふ  
 ことです。私のところに塔上の犯罪が無いのでわかりませ  
 んが、「香夢楼の隠士」といふ人の序があつて、書き出しは  
 「爰に説出すは塔上の犯罪として一時仏国巴里府の人心を  
 云々」となつて居ります。  
 涙香のものを扶桑堂で出すやうになつたのは、何時の頃か  
 らかわかりませんが、何んでも涙香が若くて窮迫して居る  
 頃、扶桑堂の世話になつたことがある様で、或時期以後の  
 著書は、全部扶桑堂から出版して居るといふ話がありまし  
 た。蝗の周六とか何んとか言はれましたが、情愴のあつた

[illegible][illegible]



人だったやうで、書くものを読んでも、涙香といふ人は、人間味の豊かな良い人であつたらうと思ひます。

私は新聞記者になりたての頃、二三度涙香に逢つて話もしましたが、無愛憎<sup>(マヤマヤ)</sup>な土佐人らしい人で、一寸人づきは悪かつたやうですが、そんなことが蝮の周六<sup>iii</sup>の名をうんだ原因かも知れません。

そこでお示しの涙香物から、御厚意に甘えて、私のところに無いのを申し上げます。そのうちから幾冊でも(ほんの二三冊で満足いたします)御恵み下されば有難いと存じます。

塔上の犯罪(「此曲者」と同じでしたら、これは御送り下るに及びません)、執念、何者、人の運、露国人、幽霊塔(これは三五版の複製本で所持して居りますが)、ひと夜の情

あんまり沢山できまりが悪くなりますが、御差支の無い丈け御割愛下されば幸せです。

先は右まで。

敬具

四月二十四日

野村胡堂

江戸川乱歩大兄

来月は私もヒマになります。是非御出を願います。渋谷から帝都の高井戸で下車、浴風園の手前とおききになれば



わかります。

浴風園の手前を生垣について左へ入ったところです。日曜は大抵居ります。

〔宛先〕 豊島区池袋三丁目一六二六 平井太郎様

〔時期〕 消印「□□/17.4.24/□□」

〔注釈〕 i 江戸川乱歩旧蔵『捨小舟』（上・中・下巻 扶桑堂 明治二十八年 江戸川乱歩記念大衆文化研究センター蔵）は、この時贈与されたものであろう。なお書簡番号〇五に「捨小舟（三冊本の内、中篇のみ所持）」とあるように、同書中巻は重複している。また『活地獄』は扶桑堂版（明治二十五年）と岩本五一版（明治二十三年）があり、胡堂からどちらを入手したのかは不明である。

ii 胡堂は新聞記者時代に会った黒岩涙香に対して「決して近づき難い人ではなく、私などは東北凶作の救済問題の討議で、若造のくせに、盛んに議論を闘わした経験さえ持っている。さぞ生意気な小僧だと思ったことだらう」と回顧している（野村胡堂『随筆銭形平次』旺文社昭和五十四年）。iii 涙香のあだな。周六は本名。

〇九 乱歩書簡（昭和十七年四月二十六日 封書40052）

御手紙と小包拝受しました。

「活地獄」「捨小舟」有難う存じました。色々御收穫ありし由、流石、獵書玄人と敬服しました。「此曲者」は「塔上犯罪」の新聞連載当時の題名です。併し柳田氏の目録にも「此曲者」といふ単行本の出で居る事記してありません。一つ新智識を得ました。恐らく珍本、御保存を希望します。御手紙にありました七部、皆汚本で恐縮ですが、別便小包にて御送りしました。美本御入手まで之にて御保存下さい。

来月の日曜日いつか御訪ねいたしたく存じます。御礼旁々右まで。

四月二十六日

江戸川乱歩

野村胡堂様

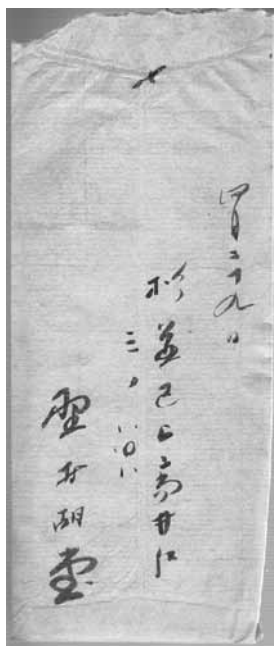
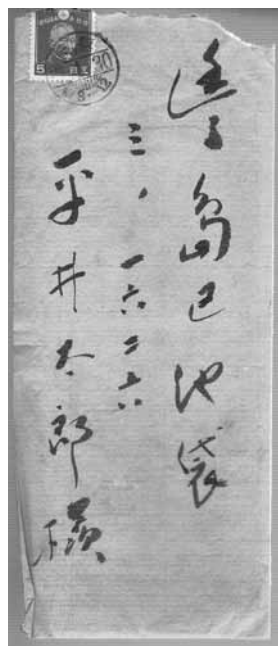
〔宛先〕 杉並区上高井戸三ノ八〇八 野村胡堂様

〔時期〕 封筒裏「四月二十六日 平井太郎 昭和十七 東京市 豊島区池袋三ノ一六二六」

一〇 胡堂書簡（昭和十七年四月二十九日 封書）

拝啓 昨日御恵送の涙香十冊いたしに落手。御深切有難





【注】

- 1 『新青年』博文館 一九四九年一〇月
- 2 江戸川乱歩『乱歩随筆』青蛙房 昭和三十五年
- 3 江戸川乱歩『屋根裏の散歩者』江戸川乱歩全集1 講談社 昭和四十四年
- 4 『江戸川乱歩全集15 幻影城（正・続）』講談社 昭和四十五年
- 5 伊藤秀雄『黒岩涙香の研究と書誌』ナタ出版センター 平成十三年。また同氏は少年探偵団シリーズの「青銅の魔人」（初出『少年』光文社 昭和二十四年一月〜十二月）に関しても、「古井戸を下りて行った地下の世界が描かれているなど、（論者注 涙香の）「八十年後の社会」の影響が顕著だ」と指摘している。
- 6 小松史生子「江戸川乱歩『幽霊塔』論——翻案テクストのストラテジー——」『日本近代文学』平成十三年十月
- 7 堀啓子「二つの『白髪鬼』——涙香と乱歩の翻案をめぐる——」『東海大学紀要』文学部 平成二十年三月
- 8 「一般文壇と探偵小説」（初出『宝石』昭和二十二年四月、五月号）、「日本探偵小説の系譜」（初出『中央公論』昭和二十五年十一月）、「日本探偵小説の系譜」（初出『中央公論』昭和二十五年十一月）。いずれも『幻影城（正・続）』江戸川乱歩全集15 講談社 昭和四十五年所収。
- 9 （論者注 大正十四年十一月）【三日】「大衆文芸」の池内祥三氏来訪、そのことで色々話す。同伴して報知新聞に行き、野村胡堂編輯顧問と本山荻舟氏に会う。」（大正十四年末の上京『探偵小説四

十年（上）『江戸川乱歩全集13 講談社 昭和四十五年』

10 『日本探偵作家クラブ会報』昭和二十九年十月（日本推理作家協会編『探偵作家クラブ会報』柏書房株式会社 平成二年）

11 黒岩涙香『巖窟王』上巻あとがき 愛翠書房 昭和二十三年（野村胡堂著・末國善己編『野村胡堂探偵小説全集』作品社 平成十九年）

12 桜痴が主筆を務めていた『東京日日新聞』に明治二十年七月三十一日から十二月二十四日まで連載された。

13 平岡敏夫「透谷と『昆太利物語』」『明治大正文学研究』昭和三十三年六月、中山栄暁「北村透谷と『昆太利物語』」『解釈』昭和四十年五月

14 野村胡堂『胡堂百話』中央公論新社 平成十九年

15 野村胡堂『随筆銭形平次』旺文社 昭和五十四年

16 「涙香に還れ」『野村胡堂探偵小説全集』前出

17 「涙香に還れ」解説『野村胡堂探偵小説全集』前出

18 『野村胡堂・あらえびす来簡集』（岩手県紫波町 平成十六年）には、乱歩書簡が計十通翻刻されている。（昭和十年十二月十二日、

昭和十七年四月十日、同十六日、同二十二日、同二十七日、昭和二十三年十月二日、昭和二十四年三月二十二日、昭和二十九年十月十三日、昭和三十一年八月十日、年月日不明一通）

19 乱歩の古書収集については拙稿「江戸川乱歩の古書蒐集とその時代」『国文学 解釈と鑑賞』平成十六年八月、「江戸川乱歩の半生と近世資料」『立教大学日本文学』平成十七年十二月参照。

20 『宝石』昭和二十五年五月（『幻影城（正・続）』所収前出）

21 『探偵作家クラブ会報』昭和二十三年十二月

22 野村胡堂『随筆銭形平次』旺文社 昭和五十四年

23 「低俗な大衆小説の下位に置かれた捕物小説が、俄然として再認識され、世の注目の的となったのは、江戸川、白石（論者注 白石潔）、両氏の力に拠るところがはなはだ大きいといわなければならない」（野村胡堂「捕物帖談義」同前）

24 『随筆銭形平次』前出

25 『幽霊塔』の刊記を指し「扶桑堂（前）三十四年一月（後）同年五月（続）同年九月 初版」を踏襲する。

26 同右

【付記】資料の閲覧等に際して御高配を賜りました野村胡堂・あらえびす記念館及び立教大学大衆文化研究センターに厚く御礼申し上げます。なお本研究は、科研費若手研究B「福地桜痴を中心とした幕末明治の文芸に関する総合的研究」（課題番号一一四七二〇一九）の成果の一部である。

（立教大学非常勤講師）